

報告

浄影寺慧遠伝小考

A Study of the Biography of Jing-ying-si Hui-yuan

高野淳一*

Junichi TAKANO

Keywords: 浄影寺慧遠、武帝（北周）、廃仏*Jing-ying-si Hui-yuan, Wu-di(Bei-Zhou), the Exclusion of Buddhism*

1.はじめに

ここで取り上げる浄影寺慧遠(523～592)は、中国中世、南北朝時代、北朝の北齊・北周から隋代にかけて活躍した僧で、北周の武帝が北齊に対して廃仏を行った際に、命を懸けて抗弁したということで著名な人物である。筆者は、この浄影寺慧遠の思想を総合的に研究することを目指しているのだが、本稿ではまずその手始めとして、かれの伝記、特に北周・武帝の廃仏をめぐる武帝と慧遠とのやりとりを中心に翻訳・紹介し、若干の考察を加えて、慧遠の思想分析に入る端緒としたいと思う。慧遠の伝記については、『統高僧伝』に載せるかれの事跡についての記述が最も詳しく、それについての分析も先学によって既にあらましまされているところではあるのだが¹、かれの伝記の詳細な翻訳は無い。慧遠の伝記を自分なりに翻訳・考察し、理解しておくことは、これからの慧遠の思想分析に先立ってやはり必要なことであると考え、『統高僧伝』の記述に沿って、かれの生きざまを自分なりに捉え直してみたいと思うのである。

2.『統高僧伝』「慧遠伝」の翻訳・紹介

まず、『統高僧伝』（大正蔵 50 巻所収、慧遠伝は巻 8、p489 下～p492 中）の記述により、慧遠の生涯をおおまかにたどっておこう。

慧遠は、俗姓は李氏、敦煌の人である。幼くして父親を亡くし、叔父に育てられた。13 歳の時に、叔父の許を辞し、僧思禪師について学んだが、経典についての理解が深く、将来を嘱望された。16 歳の時に、湛律師について鄴に行き、さまざまな経典を学び、また大隠律師から『四分律』を受けた。そのご、同学と共に清化寺に住まいしていた時に、承光 2（578）年の、武帝の廃仏に出会うことになるが、そのことについては、後に詳しく見たい。

武帝への抗弁のあと、慧遠は、汲郡の西山に隠棲し、三年の間、『法華経』『維摩経』などを誦して過ごした

が、隋代になると、召されて洛州の沙門都となり、開皇 7 年（587）年には、都の興善寺に住まい、そのご新たに浄影寺を設けてそこに住持し、開皇 12（592）年に同寺で亡くなった。

かれの著作としては、「地持疏五巻」「十地疏七巻」「華嚴疏七巻」「涅槃疏十巻」、「維摩」「勝鬘」「無量寿」「観無量寿」などの注釈書、また「大乘義章十四巻」が伝えられ、世間に流布したと言われている。

「慧遠伝」に記述されているこれらの著作のうち、「地持論義記十巻」「十地義記十四巻」「涅槃義記十巻」「維摩経義記八巻」「勝鬘経義記一卷」「無量寿経義疏二巻」「観無量寿経義疏二巻」「大乘義章二十六巻」の八部が現存し、他に慧遠の撰述とされるものとして、「温室経義記一卷」「起信論義疏四巻」の二部が指摘される²。ただし、慧遠がその生涯の何時頃の時期にこれらの諸著作をものしたか、その著作の成立時期・順番については、定論を見ていない。

慧遠の学問の傾向としては、『統高僧伝』のかれの伝記に、若い頃から大乘の講習に勤め（p490 上）、武帝の廃仏ののち隠棲していた時期に『法華経』『維摩経』を講習しまた禅観に勤め（p491 上）、のち清化寺に住持していた時期に『涅槃経』を講習していた（p492 上）との記述があり、代表的な大乘経典の研鑽に勤めると共に、禅定にも心を寄せていたことが窺える。

また、『統高僧伝』巻 26 僧听伝に、僧听が慧遠に師事して「十地」「涅槃」を学びその教えのおおもとを窮めた（p673 上）とあり、巻 26 智疑伝に、智疑が慧遠から「十地」及び「涅槃」の業を受けた（p676 中）とあり、更に巻 26 道顔伝に、道顔が慧遠に学んで「涅槃」「十地」の奥義を窮めた（p676 下）とあることなどから、慧遠が大乘経典の中でも、『十地経論』『涅槃経』の研究と講習に特に力を注いでいたことが確認できる。

*国際文化学科

次いで、北齊・承光2（578）年に交わされた、武帝と慧遠との廃仏をめぐるやり取りを、詳しく見ていくことにしよう。

まず、北周・武帝は、廃仏の詔勅を発し、以下のように主張する。

朕は天命を受け、多くの民草を養っている。しかるに、世の中には儒・仏・道の三つの教えが広まり、その教化は遙か昔から今に及んでいる。究極的な真理を考えてみると、多くが正しい教化を過つものである。いずれも廃止するのが良い。ところで、六經・儒教は、その文章は正しい政治の術を広め、礼義忠孝は、世の中で良い点を持っている。だから、それは残さなくてはならない。また、真実の仏は姿かたちが無く、太虚に在り、遙かに心に敬うものだ。ところが仏經では広く嘆じて、壮麗な図像や塔などがある。それらを作れば福をもたらすとするが、実はそんなことなどないのだ。どうして恩恵があるのか。愚かな民が信心して、財産を注ぎ尽くし、広く寺塔を建立している。既に空しく費用を使うだけで、何物をも留めえないのだ。あらゆる經像は、これを廃棄するのが良い。また父母の恩は重いものだが、僧は父母を敬わない。このはなはだしい乱れたさまは、国の法の容認するところではない。僧はいずれも家に帰らせて、孝を尊ぶようにさせるのが良い。朕の意向は以上である。すぐれた僧侶の方々は、この道理をどのように思われるのか。（朕受天命、養育兆民。然世弘三教、其風彌遠。考定至理、多皆愆化。並令廢之。然其六經儒教、文弘治術、礼義忠孝、於世有宜。故須存立。且自真仏無像、則在太虚、遙敬表心。仏經広嘆、而有図塔崇麗。造之致福、此実無情。何能恩恵。愚民嚮信、傾竭珍財、広興寺塔。既虚引費、不足以留。凡是經像、尽皆廢滅。父母恩重、沙門不敬。勃逆之甚、国法豈容。並退還家、用崇孝始。朕意如此。諸大德、謂理何如。（大正蔵 50 卷、p490 上～中））

武帝の詔勅は、世の中には儒・仏・道の三教が広まって久しいが、三つの教えのうち儒教だけが治世に役立つすぐれた点を持っているとして、仏・道の二教を廃して儒教だけを残そうとする自らの方針をまず表明した上で、大きく二つの点から仏教を批判している。一つ目は、真実の仏は姿かたちの無いものなのに、人々はみだりに図像を作り、これを礼拝し、無駄に財産を傾けている、ということである。二つ目は、仏教の僧侶が父母に対する孝行を尊ばないのは、儒教の教えに反するから、僧侶は皆還俗させるのが良いとするものである。武帝は、こうした大きく二つの点から、仏教の僧侶たちに、返答を迫るのである。

この武帝の詔勅に対し、慧遠は、舌鋒鋭く反駁を加える。まず、一つ目の、「真実の仏は姿かたちが無い」とすることについての慧遠と武帝とのやり取りを見てみよう。

慧遠は次のように言う。

「真実の仏は姿かたちが無い」ということにつきましては、まことにおっしゃる通りです。ただ、生き物は耳や目を使って、經典や仏像を頼りにして、真実を表すものです。もしもこれらを無くしてしまったら、敬意を表すことが無くなります。（詔云、真仏無像、信如誠旨。但耳目生靈、頼經聞仏、籍像表真。若使廢之、無以興敬。（大正蔵 50 卷、p490 中））

武帝が言う。

真実の仏は虚空のようであることは、皆知っているのだから、經典や仏像を借りる必要など無かろう。（虚空真仏、咸自知之。未仮經像。（大正蔵 50 卷、p490 中））

慧遠が言う。

後漢の明帝以前には、經典も仏像もまだ有りませんでした。その時に中国の衆生は、どうして真実の仏が虚空に等しいものであることを知らなかったのでしょうか。（漢明已前、經像未至。此土衆生、何故不知虚空真仏。（大正蔵 50 卷、p490 中））

武帝は答えなかった。慧遠が言う。

もしも經典による教えをかりずに教えが有ることを知っていたとするならば、三皇以前には、まだ文字が無かったにもかかわらず、人々は五常などの教えを知っていたことになりましょう。当時人々は、どうしてその母を知るだけで父親を知らず、禽獣と同じく倫理道德の無い状態だったのでしょうか。（若不籍經教、自知有法、三皇已前、未有文字、人応自知五常等法。爾時諸人何為但識其母、不識其父、同於禽狩。（大正蔵 50 卷、p490 中））

武帝はやはり答えなかった。慧遠が続けて言う。

もしも仏像には実体が無く、それを拝んでも福が訪れないので、それを廃止しなければならないとすれば、国家でお祭りする七廟の像も、どうして実体が有ってみだりにお祭りするのですか。（若以形像無情、事之無福、故須廢者、国家七廟之像、豈是有情、而妄相尊事。（大正蔵 50 卷、p490 中））

武帝はこの非難に答えずに言う。

仏教の經典は外国の教えであるから、この中国では、廃して用いない。七廟は上代にできあがったものであり、

朕はやはりそれに賛同しない。同じように廃するのが良からう。（仏經外国之法、此国不須、廢而不用。七廟上代所立。朕亦不以為是。將同廢之。（大正蔵 50 卷、p490 中））

慧遠が言う。

もしも外国の經典であるから、中国には必要無いとするのであれば、孔子の所説は、魯国から出たものであり、秦や晋の地では、廢止して行なわないのが良いでしょう。また七廟を非であるとして廢止するのであれば、それは祖先の順序を尊ばないことになります。祖先の順序が整わないようであれば、それは五經が働きを失うことになりましょう。先に儒教を残すとおっしゃったのは、道理が通らなくなります。そうであれば、儒・仏・道三教は、いずれも廢止されることになり、何によって国を治めることになるのですか。（若以外国之經、非此用者、仲尼所説、出自魯国、秦晋之地、亦應廢而不行。又以七廟為非、將欲廢者、則是不尊祖考。祖考不尊、則昭穆失序。昭穆失序、則五經無用。前存儒教、其義安在。若爾、則三教同廢、將何治國。（大正蔵 50 卷、p490 中））

武帝が言う。

魯と秦・晋とは、地域が異なるとはいっても、いずれも王者の治世下にある。だから、仏教の經典とは同類ではない。（魯邦之与秦晋、雖封域乃殊、莫非王者一化。故不類仏經。（大正蔵 50 卷、p490 中））

慧遠が言う。

もしも秦も魯も王者の教化に従うものであるから、五經などが通用するとするのであれば、中国と天竺とは、境界が異なるとはいえ、共にこの世界にある土地、そしてこの世界中は、仏陀の教化のうちにあります。どうして仏の教えに従わないで、これを廢止なさろうとするのですか。（若以秦魯同遵一化、經教通行者、震旦之与天竺、国界雖殊、莫不同在閭浮、四海之内、輪王一化。何不同遵仏經、而令独廢。（大正蔵 50 卷、p490 下））武帝は、これに対して答えなかった。

ここまでの、一つ目の「真実の仏は姿かたちが無い」ということをめぐっての、慧遠と武帝とのやり取りである。

引き続き、「孝」の問題についての慧遠と武帝とのやり取りを見てみよう。

慧遠が言う。

陛下の詔勅には、「僧侶を還俗させて民衆の中に返し、孝養を尊ばせなさい」とあるが、孔子の教えの中では「身

を立て、正しい道を行なって、父母を明らかにする、それが孝行だ」とあります。還俗して初めて孝をなすわけではありませんまい。（詔云、退僧還衆、崇孝養者。孔經亦云、立身行道、以顯父母、即是孝行。何必還家、方名為孝。（大正蔵 50 卷、p490 下））

武帝が言う。

父母の恩は重く、手厚く養わねばならない。親を捨てて肉親と疎遠になるのは、「至孝」とは言えまい。（父母恩重、交資色養。棄親向疎、未成至孝。（大正蔵 50 卷、p490 下））

慧遠が言う。

おっしゃるとおりであれば、陛下の身近な人々には、皆二親があります。どうしてかれらを拘束して、長く五年も使い、かれらを父母に会わせないのですか。（若如来言、陛下左右、皆有二親。何不放之、乃使長役五年、不見父母。（大正蔵 50 卷、p490 下））

武帝が言う。

朕もまた順番によって、皆帰りつとめさせるようにしよう。（朕亦依番、上下得歸侍奉。（大正蔵 50 卷、p490 下））

慧遠が言う。

仏教でもまた僧侶たちに、冬・夏の間は縁によって修道させ、春・秋には家に帰って両親を養うということがあります。だから目連は乞食をして母に食を手向け、仏陀は棺を背負って葬送に臨んだのです。この道理は大いに通じるもので、仏教だけを廢止してはならないのです。（仏亦聽僧冬夏隨縁修道、春秋歸家侍養。故目連乞食餉母、如来擔棺臨葬。此理大通、未可独廢。（大正蔵 50 卷、p490 下））

武帝はこれに答えなかった。

ここまでの、二つ目の、父母に対する孝行をめぐっての、慧遠と武帝とのやり取りである。

二人のやり取りは、以下にクライマックスを迎える。

慧遠は声を荒げて言う。

陛下は今、自在な力をもって、三宝を破滅させようとしています。これは邪見の人に他なりません。阿鼻地獄は、貴賤を選びません。陛下もどうか恐れてくださいませ。（陛下今恃王力自在、破滅三宝。是邪見人。阿鼻地獄、不束貴賤。陛下何得不怖。（大正蔵 50 卷、p490 下））

武帝が大いに怒り、慧遠をにらみつけて言う。

ただ民草に樂を得させたいと思うもの、朕もまた地獄の苦しみを避けるものではない。（但令百姓得樂、朕亦不辭地獄諸苦。（大正蔵 50 卷、p490 下））

慧遠が言う。

陛下は、邪惡な教えをもって人々を教化し、現に苦しみを招く種を撒かれています。私も陛下と共に阿鼻地獄に参りましょう。どこに楽しみが有りましょうや。（陛下以邪法化人、現種苦業。当共陛下同趣阿鼻。何処有樂可得。（大正蔵 50 卷、p490 下））

以上のようなやり取りを終えた後、役人がその場に参集した僧の名を記録して散会するという事になった。そのご、武帝により、仏・道二教の廃止が実施されることになる。結果としては、慧遠の抗弁も、廃仏を中止させるまでには至らず、その意味で実を結ばなかったわけだが、並み居る僧侶たちの中、一人果敢に舌鋒鋭く武帝に立ち向かったことで、かれは「護法菩薩」と周囲から呼ばれ、後世に名を残すことになるのである。

3. 小考

前節では、廃仏をめぐる武帝と慧遠とのやり取りを翻訳・紹介した。本節では、それを踏まえ、若干の考察を加えてみたいと思う。

既に触れたように、武帝の詔勅は、大きく二つの点から廃仏を提案している。一つ目は、真実の仏は姿かたちの無いものなのに、人々がむやみに図像を作り、礼拝して、無駄に財産を傾けているということである。二つ目は、仏教の僧侶が父母に対する孝行を尊ばないのは、儒教の教えに反するから、僧侶は皆還俗させるのが良いとするものである。

この二つの論点を中心に、慧遠と武帝とのやり取りがなされる中で、いくつかの問題が浮かび上がる。

まず、「真実の仏は姿かたちが無い」ということについてである。この問題は、仏教伝来以来、いわゆる法身の問題に関わり、議論されてきたことである。すなわち、仏の真実の法身は如何にあるか、去来も無く、起滅も無く、通常感覚では捉えられないのが、真実の法身だとする議論を踏まえているように思われる³。慧遠の反論は、經典や仏像というすがすがしければ、衆生は真実の仏のすがたに触れ得ないとするものである。そこには、真実の事柄は、目に見える形ではなかなか表しがたいものにはあるのだが、それを何らかの形で掴むためには、何らかの目に見え声に聞こえるものが無ければならないとする、慧遠の姿勢が反映しているようである。たとい真理が通常の言語や感覚を超越しているもののだとしても、そ

れを把握するためには、言語や通常感覚を手掛りにせざるを得ないとする、南北朝時代の大乗仏教の一つの考え方が、ここに明らかに表明されていると考えられるのである。

またこのことに関わって武帝に指摘・批判された、人々がむやみに図像を作り礼拝して、財産を傾けているということについては、貴族たちが税金対策として競って土地や屋敷などを寺院に寄進していたこと、また税金を逃れるために出家得度する者が沢山いたという、当時の社会的背景が考えられる。武帝の廃仏の政策は、こうした風潮を防ぐ意味があったと考えられるのである。

さて、武帝は更に、仏教の教えは外国の教えであるから、この中国には通用しないことを述べるが、それに対する反論の中で、慧遠は、中国と天竺とは、同じく仏陀の教化の範囲内にあるものであり、従って、仏教だけを排斥するのは、道理が通らないことを述べる。慧遠のこの反論も、仏教伝来以来の、仏教は夷狄の教えであり、文明国である中国にはふさわしくないとする議論を踏まえたものである⁴。

孝行の問題について、慧遠は、僧侶の行いにも孝行の規定があることを指摘し、逆に、仕官によって親元を離れざるを得ない儒教的官僚の方が、孝行の道を離れていと論破する。この慧遠の反論も、仏教伝来以来の、出家した僧侶が親に対する孝行を果たしうるかどうか、という議論を踏まえたものだと言える⁵。

このように見てくると、武帝に対する慧遠の反論は、いずれも、仏教伝来以来の、仏教受容に関わる問題意識を踏まえたもので、慧遠独自の新味は、さほど窺われないうと、おおむね見ることができる。中国における仏教受容の中で、慧遠以前に既に存在した、法身の問題、夷狄の教えの問題、孝行の問題を、従来の見解を踏まえながら、存分の気概を持って武帝に対して開陳したところに、慧遠の本領があったと言える。そうした慧遠の果敢な抗弁にもかかわらず、武帝の仏・道二教の廃絶が結果的に断行されたのも、慧遠の抗弁が、何らかの新味のある積極的に仏教を擁護するものとして、武帝の胸にまで響かなかったからと言える。あるいは、慧遠の抗弁の有効性いかに関わらず、武帝の廃仏に対する意欲が、極めて強固であったと言える。ただ、「真実の仏は姿かたちが無い」という議論の中では、当時の大乗仏教隆盛の背景を踏まえ、真実を掴むためには何らかの目に見えるすがすがしが必要であった点に、慧遠独自ではないにせよ、仏教伝来当初とはまた違った真理とそれを掴む手段との関わりについての思索が、深く息づいているようにも思うのである。

以上、廃仏をめぐる慧遠と武帝とのやり取りについて、若干の考察を試みた。そこでいよいよ、慧遠の思

想内容の分析に迫っていくことになるのだが、それらについては、また稿を改めて論じてみたいと思う。

注

- 1 鎌田茂雄『中国仏教思想史研究』（春秋社、1968 年）第二部第一章「浄影寺慧遠の思想」第三節「浄影寺慧遠の生涯」が、慧遠の伝記を紹介し、廬仏をめぐる武帝とのやり取りを手際良くまとめている。だが、そうした両者のやり取りについての詳しい論及・考察は無い。
- 2 慧遠の著作は、中国唐代の代表的な経録、静泰『衆經目錄』（665 年頃成立）、道宣『大唐内典録』（664 年）、智昇『開元釈教録』（730 年）などには、意外にも見受けられない。一方、日本で編まれた経録の中に、慧遠の撰述とされる著作が多く記録されている。まず、円超『華嚴宗章疏并因明録』（914 年）に、「華嚴疏七卷」「起信義疏二卷」「十地論疏七卷」の三部が見える。次いで、永超『東域伝灯目錄』（1094 年）に、「華嚴疏七卷」「金剛般若經疏一卷」「妙法蓮華經經疏七卷」「無量寿經經疏一卷」「觀無量寿經疏一卷」「勝鬘經經疏二卷」「維摩經義疏四卷」「温室經經疏一卷」「金光明經義疏一卷」「涅槃經義記十卷」「十地論疏七卷」「金剛般若論疏三卷」「起信論論疏二卷」「大乘義章二十卷」「法性論一卷」の十五部が著録されている。また、高麗・義天『新編諸宗教藏總録』（1090 年）に、『東域伝灯目錄』所載の十五部のうち「金剛般若經疏」「妙法蓮華經經疏」「金光明經義疏」「金剛般若論疏」「法性論」の五部を除いた十部と、『東域伝灯目錄』には見えない「地持經義記十卷」一部が著録されている。なお、慧遠の著作については、横超慧日「慧遠と吉蔵」（『中国仏教の研究第三』所収、法蔵館、1979 年）に手際良くまとめられているので、参照されたい。
- 3 例えば、東晋の廬山・慧遠と鳩摩羅什との問答を記録した『大乘大義章』（大正蔵 45 卷所収）は、冒頭に法身についての慧遠の問いかけを次のよう載せる。「遠問曰。仏於法身中為菩薩說經、法身菩薩乃能見之。如此則有四大五根。若然者、与色身復何差別、而云法身耶。經云、法身無去無来、無有起滅、涅槃同像。云何可見、而復講說乎。」（大正蔵 45 卷、p122 下）真の法身が目で見えられないものであるかどうかについての問いかけになっていると思われる。
- 4 三国時代の「牟子理惑論」（『弘明集』所収、大正蔵 52 卷所収）に次のようにある。「問曰。…吾子弱冠学堯舜周孔之道、而今捨之、更学夷狄之術、不已惑乎。牟子曰。…漢地未必為天中也。仏經所說、上下周極、含血之類、物皆属仏焉。是以吾復尊而学之。何為当捨堯舜周孔之道。」（大正蔵 52 卷、p3 下）仏教を夷狄の教えと断じ、文明の中心たる中国にふさわしい教えではないのではないかとする問いに対し、仏教側に立つ牟子は、中国は必ずしも世界の中心でないし、世界中が仏の教えの範囲内にあるので、自分はそれを学ぶのだ、と答えている。
- 5 三国時代の「牟子理惑論」に次のようにある。「問曰。夫福

莫踰於繼嗣、不孝莫過於無後。沙門棄妻子捐財貨、或終身不娶、何其違福孝之行也。…牟子曰。…妻子財物、世之餘也。清躬無為、道之妙也。…沙門修道德、以易遊世之樂、反淑賢、以背妻子之歡。」

（大正蔵 52 卷、p3 上）沙門が妻子を捨て財産を捨てて出家するのは、はなはだ孝に悖るのではないかとする問いに対し、仏教側に立つ牟子は、妻子や財産は、世の中の余り物であり、沙門は道の奥深いところを究めて、妻子や財物に対する欲望に代えるのだ、と述べる。